

連載  
200

# 日本現代文学の英訳刊行——その舞台裏と思わぬ波及効果

片岡真伊『小説とノヴェルのあいだ：戦後期日本小説の英訳・出版現場の探求』

稲賀繁美

国際日本文化研究センター研究員・  
総合研究大学院大学教授・  
放送大学客員教授

第二次大戦後、英語圏では日本文学の翻訳・刊行が盛行を見せる。事業の中核を担ったのはクノップ社 Knopf。同社旧蔵資料や、やがて著名な翻訳者となるサイデンステッカー E. Seidenstecker 他との書簡を探ると、舞台裏が見えてくる。川端康成のノーベル文学賞受賞も、この翻訳出版企画が当初から目論んだ成果の、帰結のひとつだった。片岡真伊の博士論文はここに着目した。

文学の翻訳研究では、誤訳探しが横行する。だが誤訳は純粹に個人翻訳者の責任だったのか。翻訳プロジェクトには、責任者ハロルド・シュトラウス Harold Strauss が居り、その後には、閲読者や助言者などが関与する。プログラム第1作は大佛次郎『帰郷』（英訳 *Homecoming*, 1955）。その「序文」には、鶴見祐輔の『母』戦前期の英語版序文にチャールズ・ピアードが盛った観察が生かされている。これだけでも大発見だが、日本小説の特異性を事前に説明するこの配慮は、かえって読者の反発を招いた。第2作目の谷崎潤一郎『蓼食ふ虫』（*Some Prefer Nettles*, 1955）では、原作では読みどころの家族会話が、英訳では話者不明で混乱する。登場する犬が「叔父さん」に変身を遂げるといふ、傑作などんでん返し（稲賀の解釈）は、削除されて蒸発した。英訳が反復を厭うがゆえの悪しき副作用である。日本語「会話」と（身分性別が希薄な）英語 dialogue とは等価ではなく、翻訳を無事に透過もしない。大岡昇平『野火』（*Fires on the Plain*, 1957）では、複数の時間が交錯する原作の伏線や構構が大胆に整除され、大岡の不興を買った。登場する精神科医の専門的言説は、なぜか英訳では忌避される。日本の現代小説にそんな西洋医学的蘊蓄は期待されない。

なぜ原著は変貌を遂げ、原典とは乖離した英語訳はいかに伝播したのか。谷崎潤一郎『細雪』（*The Makioka Sisters*, 1957）には有名な「鎧狩り」の場面がある。川の兩岸を交錯する複数の声が見えてくる。これは英文法上に大混乱を惹起し、閲読者は翻訳者を無能呼ばわりした。題名が『時阿姉妹』へと改称された舞台

裏の解明も、本論文のお手柄。トーマス・マンの『ブッテンブローク家の人々』などへの類推が読者の関心を引くことが決め手となる。川端の『千羽鶴』（*Thousand Cranes*, 1964）の表紙絵では、折鶴が依屋宗達（の意匠かを巡り、訳者、編集者、原作者を巻き込む「解釈の葛藤」が発生する。

囲碁の勝負を描く川端康成『名人』（*The Master of Go*, 1972）では、翻訳完成直前にノーベル文学賞受賞者が自裁するという椿事が発生し、それが「東洋の賢人」像の完遂に貢献する。他方、北米の囲碁愛好者からは翻訳の不備も指弾される。名人が「残り時間1分」で百手も指したと訳者が誤解したため、原作の「気合い」に込められた静謐なる緊迫感、乱闘同然の「暴力」沙汰に化けてしまった。後の独訳はこの点を宜しく是正する。

翻訳は異質なものを跨ぐ越境だが、翻訳こそが拓く可能性も無視できない。三島由紀夫の『金閣寺』（*The Temple of the Golden Pavilion*, 1959）では主人公の心理を映す隠喩表現が、直訳すると意味不明に陥る。翻訳者と編集者との間に発生した熾烈な駆け引きは読み応え十分。大佛次郎『旅路』（*The Journey*, 1960）の登山の場面では、主人公の心象と自然描写とが渾然一体に進展する。だがこの「山場」は anticlimax と評され、全面的に切除される。日本の新聞連載小説の結核とは異なる位相の climax を北米の novel は要求していた。

反対に英国作家アンガス・ウィルソン Angus Wilson は『細雪』末尾の描写に吃驚する。長編は主人公の下痢の描写で「唐突」に終わる。だがそれは、翻訳者が「雪子」の回想を姉の「幸子」の発言と取り違えた（人称と時制の）錯誤に加え、地の文で想起された和歌を italic 表記で改行・独立させた英訳の typography ゆえに生じた「唐突感」だった。原作では想定外で不在だった筈の効果が、誤訳のお陰で、読者に思わぬ反響を惹起した事件だった。  
\*総合研究大学院大学・文化科学研究科、国際日本専攻提出の博士論文審査（2019年8月27日）に取材した。きわめて完成度の高い画期的な博士論文であり、書籍としての刊行が待ち望まれる。